

茨城県吟詠剣詩舞総連盟
県北地区協議会

第二十五回記念 吟詠剣詩舞道大会

構成吟 源平の乱世に激しく咲いた一輪の愛

静と義経

とき 平成二十一年九月二十七日(日)午前八時開場
ところ 東海文化センター

電話〇二九(二八二)八五一

主催 茨城県吟詠剣詩舞総連盟県北地区協議会
後援 茨城県吟詠剣詩舞総連盟
東海村教育委員会・東海村文化協会

ご挨拶



茨城県吟詠剣詩舞総連盟
県北地区協議会

会長 佐竹霞邦

本日は、茨吟連県北地区協議会主催による第二十五回記念「吟詠剣詩舞道大会」を開催いたしましたところ、吟界の各流各派の諸先生をはじめ村内の有志の方々並びに一般入場者の皆様等、この東海文化センターの会場をとことろ狭しと埋めていただき、記念大会が盛大に開催できますことは、主催者一同この上もない喜びであります。

さて、この大会の最大の目的とするところは、年毎に行われている大会とは趣をかえ新しい試みとして、合吟の発表、構成吟「静と義経」の数奇な運命を再現しご披露することにあります。

本日は、県北の風を吹かせようと短い時間に凝縮した大会であります。日々研鑽した吟詠剣詩舞道大会を最後までご声援戴きます様お願い申し上げます。

本日の大会が、参加者及びご入場の方々の意義ある一日となりますことを祈念申し上げてお礼のこ
とばと致します。

大会役員

(順不同敬称略)

大会相談役

茨吟連理事長 長岡鳳晃
 茨吟連副理事長 埴電光齋

“ “ “ “ “ “ “ “ “ “

吉田裕峰 片岡霞風 川野邊司風

“ “ “ “ “ “ “ “ “ “

藤桜風 富岡城昶 莊司錦城

“ “ “ “ “ “ “ “ “ “

石崎崇鵬 協南土浦地区協議会会長 協南石岡地区協議会会長

“ “ “ “ “ “ “ “ “ “

杉山吟花 珂北地区協議会会長 県西地区協議会会長

“ “ “ “ “ “ “ “ “ “

小泉吼峻 県東地区協議会会長

“ “ “ “ “ “ “ “ “ “

鎌田定郎

大会会長 佐竹霞邦
 大会参与 竹内岳聳
 実行委員長 藁谷宗陽
 実行副委員長 伊藤錦秀
 実行委員 佐藤電秀
 向井靜峰
 軍地岳幽
 長田電枝
 赤津暁昇
 神永電月

受付

來賓 ○佐竹霞鳳
 茨吟連 ○伊藤錦秀
 塚原敬華

霞成吟會 ○関霞誠
 構成吟會 ○野崎電彩
 合吟・一般劍詩舞 ○向井靜峰
 前澤光玉

優待者(チケット) ○角田旗峰
 寺島由幸
 熊澤暁美
 軍地岳幽
 坂本岳龍
 島田岳心
 照沼霞峰

進行・舞台 ○坂本岳龍
 進行・舞台 ○坂本岳龍
 進行・舞台 ○坂本岳龍

会場警備 ○横山岳峰
 安齋燿山
 照沼電月
 神永電月
 照沼華岳

接待 ○神永電月
 照沼華岳

會計 ○石川芳岳
 事務局長 ○田中霞良

深谷岳愨
 田中霞良
 野崎電彩
 早川貴陽
 佐竹霞鳳
 坂本岳龍
 角田旗峰
 石川芳岳
 細谷晃岳
 田崎電輝

河野霞清
 大竹華陽
 島田紫陽
 小野寺霞鏡
 立花遊陽
 一ノ瀬錦蘭
 宮崎霞洋
 池田電聰
 山内晨峰
 三戸浩雪
 植田桜陽

赤津暁昇
 堀田暁春
 関山美陽
 早川貴陽
 堀江錦天
 斎藤霞洲
 飛田霞誠
 緑川雄岳
 田崎電輝
 滑川泷風

安健岳
 石井暁賀
 住谷電翔
 関祐岳
 沼田靜華
 長田電枝
 小椋電珠
 繡風

長田電枝

大会次第

1. 開会の辞 佐藤電秀 (9:00)
2. 国歌斉唱 深谷岳愨
3. 合吟 伊藤錦秀
4. 合吟の部 (9:10~10:00)
5. 一般剣詩舞 (10:10~10:40)
6. 式典 (10:50~11:30)
 - (1) 開式の辞 藁谷宗陽
 - (2) 大会会長挨拶 佐竹霞邦
 - (3) 来賓祝辞
 - (4) 閉式の辞 竹内岳聳
7. 構成吟 『静と義経』 (11:50~13:00)
源平の乱世に激しく
咲いた一輪の愛
8. ご招待者大合吟 『筑波山』 (13:00)
9. 閉会の辞 向井静峰
10. 万歳三唱 坂本岳龍
11. 記念祝賀会 (13:30~16:00)

JA東海会館にて

一、合吟の部

1、夜墨水を下る

服部 南郭

茨城岳風会
佐野詩吟会

細谷 晃岳

細谷 法風

菊池 和風

砂押 佐風

砂押 連風

丹羽 邦山

小石川昂山

薄井 宏山

檜山 京山

松本 陽泉

北川 博泉

松木 勉泉

松木 恵泉

小石川溜花

森 愛美

澤邊萌絵子

照沼明日香

照沼 朋香

松本 夏子

松本 要

山田 翔太

山田 紋寧

2、胡隠君を尋ぬ

高 啓

吟詠錦秀会

松本 錦桂

村山 錦宝

増井 錦幸

鳥居塚錦成

堀江 錦天

堀江 錦理

沼田 静華

武内 虹華

大友 薫華

宇佐美曠華

3、磯浜望洋楼に登る

三島 中洲

茨城 岳風会
那珂 湊孝風会

吟道 龍洸会

鈴木 馨華	黒沢 豊華
三戸 浩雪	緑川 雄岳
鈴木 趣水	小野ひろみ
小野 文江	皆川さち子
小松千恵子	寺島 由幸
佐藤 恵	柴田キクエ
澤田 岳双	吉川 巧岳
平戸 光岳	石井 浩風
永井 洋風	根本 康風
横須賀美風	飛田 博風
斉藤 美風	武藤 千風
海老澤洋風	真崎 朝風
北見 龍洸	神永 汪龍
黒澤 翠龍	渡邊 澄城
井上 美城	黒澤 清城

4、舟中子規を聞く

城野 靜軒

吟道祥陽会

大竹 華陽 早川 貴陽

柏 翔陽 須田 萌陽

益子 鹿陽 大貫 香陽

植田 桜陽 藁谷 淑陽

高山 虹陽 岡部 光陽

立花 遊陽 大和田 景陽

島田 紫陽 横山 峰陽

関山 美陽 鈴木 楽陽

山口 禅陽 宮田 好祥

本田 杞祥 村山 麗祥

柴田 法祥

5、海南行

細川 賴之

暁 桜 会

赤津 暁昇 石井 暁賀

堀田 暁春 熊澤 暁美

鈴木 暁絺 久保田 暁定

石井 暁清 片寄 米桜

高橋 暁月 安島 暁勝

小田部 智桜

茨城 岳風会

滑川 泱風 小椋 繡風

6、芳野懷古

藤井 竹外

茨城 岳風会

芳 叢 会

好文会

尚和会

吟窓会

千嶂会

深谷 岳惣
所 瑤岳

下山田韶岳

竹内 岳聳

坂本 岳龍

軍地 岳幽

島田 岳心

横山 岳峰

石川 芳岳

綿引 定岳

古橋 司岳

大内 良岳

安 健岳

郡司 昭岳

岡本 朗岳

齊川 恵風

澤畠 勝風

鈴木 豊山

安齊 熠山

武藤 羨山

松本 士山

大橋 臣男

坂本 絢岳

小林 湧岳

大宮 雄岳

竹内 裕岳

鈴木 悠岳

関 祐岳

磯崎 娟風

大塚 紀風

小林 芳風

7、出郷の作

佐野竹之助

霞朗詠会晴嵐会

佐竹 霞邦 佐竹 霞鳳

関 霞誠 赤川 霞周

齊藤 霞州 田中 霞良

飛田 霞誠 照沼 霞峰

神永 霞星 河野 霞清

佐藤 霞恭 佐藤 霞幸

湯沢 霞扇 小野寺霞鏡

小野瀬霞郷 川手 霞恵

河野 霞艶 宮崎 霞洋

鈴木 霞綾 佐藤 霞紅

山崎 桜澄 飛田 桜瀨

黒澤 桜香 石川 由美

8、夜墨水を下る

服部 南郭

八洲流吟詠会

向井 静峰 山内 晨峰

山形貴久峰 村田 詣峰

野崎 踊峰 長田美枝峰

羽下紀美峰 古川 琉峰

興野 締峰 前澤 葵峰

田所 燎峰 小川 偲峰

9、早に白帝城を発す

李

白

茨城岳風会好文会

山形	韶峰	笹嶋	姣峰
流石	岡峰	鈴木	聊峰
萩原	窈峰	高橋	熠峰
西野千恵峰	角田	幟峰	
沢畑	湜峰	馬場	燁峰
久下沼舘峰	石田	浥峰	
岩城	美岳	平間	敬岳
関口	恵岳	西岡	明岳
照沼	華岳	村田	俊岳
米川	玲岳	八木	芳風
照沼	清風	薮	綾風
会田	喜風	平野	琅風
森田	辰風	菊地	麗風
大場	穂山	佐々木	桃山
荻野谷	颯山	山崎	紅山
山崎	春泉	照沼	佳山
海老根	ツギ	照沼	辰子

二、一般劍詩舞

10、筑波山

本間憲一郎

劍舞

水府新刀流
光菊神武館

多田光仁
白山光登
瀬谷光勲

吟

吟道祥陽会

立花遊陽

11、武蔵野を讃う

土屋 忠司

詩舞

水府新刀流
光月神武館

根本光孔
小田光節
関口光宗

吟

吟道祥陽会

岡部光陽

12、西南の役陣中の作

佐々 友房

劍舞

水府新刀流
光菊神武館

立原光重
根本光怜
金城光妃

吟

吟道祥陽会

横山峰陽

13、富士山

石川 丈山

詩舞

水府新刀流
光菊神武館

國谷光惠
黒沢光碧
佐々木光艶

14、西南の役陣中の作

佐々 友房

劍舞

水府新刀流
忠庸神武館

菊池光蓉
小野光華
田崎光視

15、桜花の詞

作者不詳

詩舞

水府新刀流
多賀神武館

茅根光媛
斉藤光胡
大光山沙
橋本光連
級木光彗
黒澤淳峰
澤畠桂峰

吟

茨城岳風会好文会

横山岳峰

吟

八洲流吟詠会

吟

茨城岳風会好文会

安健岳

16、弘道館に梅花を賞す

徳川 景山

詩舞

水府新刀流
光枝神武館

久下沼光芳
中村光洋

山本光智
大内光紀

澤田岳双

吟
茨城岳風会
那珂湊孝風会

17、大楠公

河野 天頼

詩舞

常磐神刀流
明風会

黒羽喜風
岩井瑞風

宮田唱風
圓井双風
稲葉陽風

吟

霞朗詠会暗嵐会

齊藤霞州
照沼霞峰

18、武蔵野を讃う

土屋 忠司

詩舞

水府新刀流
英光神武館

田村光綾
本橋光絢
住谷光瑛

吟

吟道龍洗会

北見龍洗

三、式典

司 会 鬼澤典子

一、開式の辞 大会実行委員長 藁谷宗陽

一、大会々長あいさつ 県北地区協議会々長 佐竹霞邦

一、来賓祝辞 東海村長 村上達也

衆議院議員 梶山弘志

茨城県知事 橋本昌

東海村議会議長 鈴木昇

東海村教育長 高橋健彦

東海村文化協会長 萩野谷博

茨吟連理事長 長岡鳳晃

霞朗詠会総本部長 鬼澤霞

(助)茨総連理事長 鈴木海洲

一、表彰

一、閉式

大会参与 竹内岳聳

(10..50)

四、構成吟

(11..50)

源平の乱世に激しく咲いた一輪の愛

静と義経

企画・構成	記念大会実行委員会
監修	佐竹霞邦
舞台総括	佐藤電秀
シナリオ	坂本岳龍
伴奏	早川貴陽
ナレーター	水野紀美子
鬼澤典子	
照明	東海文化センター
進行	石川芳岳
舞台装置	晴嵐会有志

今を去る事八百有余年、強く美しく時代を駆け抜けた男がいた。源平の乱世に颯爽と現れ、瞬く間に時代の寵児となり、そして彗星の如く消えていった悲劇の英雄「源義経」。

そしてこの義経への愛に一生を懸けた一人の女性がいた。

その名は「静御前」。静とはどのような女性であったのか。その足跡を尋ねるとしよう。

静は義経と吉野山で別れて以来、追慕の念いよいよ激しく、風の便りに義経が平泉に居ると聞き、早速平泉を目指して都を発った。しかし下総の国 猿島（茨城県総和町下辺見）まで辿り着いた時、義経の死を知り、後ろ髪を引かれる思いで都へ引き返したと云われている。

今、義経最期の地、平泉高館に立ち一望すると、八百年の時を越え、北上の大河がゆつたりと眼下に流れている。

静もこの地に立ったなら何を想ったであろうか。

奥の細道

松尾芭蕉

都を出でて幾百里

奥の細道ふみわけて

思いははせる平泉

偕も義臣すぐつて此の城にこもり

功名一時の叢となる

国破れて山河あり

城春にして草青みたりと

笠打ち敷きて時のうつるまで

涙を落し侍りぬ

夏草や兵どもが夢の跡

兵どもが夢の跡

吟 舞

鈴	沢	長	石	島
木	畑	田	川	田
光	光	電	芳	岳
幸	祥	枝	岳	心

静の初恋

源氏の総大将 源義朝は、平治の乱で平清盛との戦いに敗れ、義朝の愛妾常盤御前は、今若、乙若、牛若の幼子を連れ雪中を逃れる。寒風吹きすさぶ道すがら、まだ二歳の牛若は母の乳を求めて泣き叫ぶのである。

常盤孤を抱くの図に題す 梁川星巖

吟 伊藤錦秀
舞 石井電珠

雪は笠檐に灑いで風袂を捲く

呱呱乳を覓むるは若為の情ぞ

他年鉄枴峰頭の嶮

三軍を叱咤するは是れ此の声

母子は捕らえられたが、清盛の母、池禪尼の助命懇願と常盤の美貌に清盛の心も動き母子の命は助かったのである。

やがて牛若は十一歳の時、僧侶になるべく、鞍馬山にあずけられた。その頃静はやつと二歳になつていたのである。

鞍馬の牛若

松口月城

吟 関 霞 誠
舞 若 狭 翔 光

恩讐脈々心肝に徹す

鞍馬山の牛若丸

経文を読まず韜略を読む

練磨の一剣天に倚って寒し

鞍馬山での牛若は日夜学問と武芸に励み、いつの日か平氏を倒すのを夢みていた。静が五、六歳になった頃、周りの大人達が拍手喝采して喜ぶ爽快な事件が起きた。五条の橋で夜な夜な悪事を働く大入道おおひりだうを少年が打ち負かしてしまったのである。それが鞍馬の牛若丸であるらしいとの噂が都中に広がり、静の小さな胸にかすかな憧れの灯が点つたのである。

五条橋

松口月城

吟

みなもとの流れつきせぬ加茂川の

五条の橋にほまれのこして

舞

坂本岳龍
軍地岳幽
池田電聰
藤田電彗

五条の橋畔月下の笛

弁慶剛勇薙刀の光

源家の曹子是れ牛若

鉄扇能く払う白刃の霜

前後左右飛鳥の如し

朱欄高き処黄裳翻る

千刀の悲願遂に就らず

戈を捨て罪を詫びる武蔵坊

鴨の清流水静々

笛の音遠く去って余韻長し

義経の栄光

それから間も無く、十六歳になった牛若は鞍馬山を飛び出し、途中元服し、名を源九郎義経と改め、奥州平泉の藤原秀衡ふじわらのひでむねの許へ身を寄せた。

静もこのころから母磯禪師いそのぜんじより、白拍子注②として、舞の稽古は勿論、和歌、今様いまよう、有職故実ゆうしやくこじつ、作法等ほうを本格的に教えられ、十五歳の時には、後白河法皇より日本一の白拍子注③と称たえられる程になつていた。

月日は流れ、静が十七歳の時、都中をあつと云わせる戦いくさが起こつた。あの憧れの義経が絶対的に有利な平家を一ノ谷で奇襲を用い破つたのである。

注① 磯禪師 遊女であつた磯は、天性の美貌に加えて歌舞に抜群の才能を発揮、白拍子を遊女の芸から立派な芸道へと大成させた一人。

注② 白拍子 本来は神に奉納する男巫おとこまじの芸能であつた。白拍子が女でありながら烏帽子えぼし、刀、水干すいかんを着て舞うのはその為である。平安末期、遊女がこれを取り入れ、芸として確立した。

注③ 日本一の白拍子 寿永元年、宮中神泉苑で催された雨乞あまごいの祈禱舞で、白拍子百人が奉納した。最後に舞つたのが静であつた。素晴らしい技に感嘆した後白河法皇は日本一と称え、褒美に御衣を下賜した。

奇襲鴨越

大野恵造

翠巒碧浪砦を守り

一の谷の防備頗る固し

義経敵の虚を衝かんと欲して

密かに六甲の一角を扼す

人馬一体忽ちにして下る

岨々峻々の鴨越

潰走の兵海上に逃る

矢は飛びて鮮血液を彩る

吟 舞

萩	国	関	堀	大	茅	山	向
谷	定	野	越	越	根	内	井
光	光	光	光	光	光	晨	静
稀	恵	粹	碧	朋	援	峰	峰

義経のまさかの勝利に都中は沸きかえり、凱旋の見物人は都大路を埋め尽くした。

静もひと目見ようと高鳴る鼓動をおさえ、物陰からじつと待った。いよいよ義経の登場に静は衝撃を受けた。この時、都の空に一条の光明が走り、義経の周りが明るくなった。なにかが変わると思われたのである。

一方この戦で最も哀憐の情をそそられたのは平敦盛であった。わずか十六歳で儂くも須磨ノ浦の露と消え、名笛「青葉の笛」は二度とその調を奏でることはなかったのである。

和歌

竹内蕉龍

須磨の浦 青葉の笛の音も悲し

散りゆく若木の 桜悼みて

吟 舞

関	大	照	仲	金
佑	宮	沼	田	長
岳	雄	光	光	光
岳	岳	景	明	輝

青葉の笛

松口月城

一の谷の軍營遂に支えず

平家の末路人をして悲しましむ

戦雲収まるところ残月有り

塞上笛は哀し吹きし者は誰ぞ

義経の活躍に、後白河法皇は官位を与え、院への昇殿を許した。そんなある日、法皇は静に「義経は田舎者ゆえ、そなたが指南役として、有職故実、都風の作法を教えてやるように」と命じた。静は義経の館に通うようになり、いつしか二人は深い愛に包まれて行くのであった。年が明けると（義経二十七歳、静十八歳）義経は平家討伐に西国に向けて出撃し、屋島の戦でまたも勝利したのである。この戦では坂東武者那須与一が大いに名を揚げた。

那須与一宗高

松口月城

吟 赤津暁昇
舞 桑名宝光

一矢弦いっしげんに在りあ一生いっしょうを懸くか

宗高むねたかの心事しんじたれか情じょうに堪たえんや

源平げんぺいの合戦かっせん詩趣ししゅ多しおほ

軍扇ぐんせん羽々へん波なみに入いつて明あきらかなり

義経の快進撃は次々に都に届き、静も堀川館で無事を祈りつつ満たされた日々を送っていた。
いよいよ追いつめられた平家は壇ノ浦で最後の決戦に及んだが源氏の勢は止められず、ついに
文治元年三月二十四日、滅亡したのである。この時、御歳八歳の安徳天皇の入水という痛ましい
出来事はものの哀れを一層深くするものであった。

壇の浦を過ぐ

村上仏山

吟 塚原敬華
舞 神永電月

魚莊ぎょどう蟹舎かにや雨煙あめけむりと為なる

蓑笠さりめうひと独り過すぐ壇だんの浦うらの辺ほとり

千載せんざいの帝魂ていこん呼よべども返かえらず

春風腸しゅんぷうはらわたを断たつ御裳みもすそ川

吉野の哀別

哀れな平家の末路とは逆に、義経の凱旋は前にも増して華々しく、古今未曾有の英雄と仰がれたのである。しかしながら、ものふ武士の運命さためとは儂はかなきもの、あの四月の凱旋からわずか半年で都注④を追われるとは誰が想像できたであろうか。義経一行はひとまず九州方面へ落ちのびるはずが途中嵐に遭い、吉野山に至ったのである。

吉野山は女人禁制、二人の道行は叶わなくなり、別れる事となった。義経は懐から鏡を取り出し「これを義経と思ひ会いたい時は眺めるが良い」と渡した。静は義経の顔をじつと見つめ、次の和歌を詠んだ。

注④ 義経、静の都落ち

義経、頼朝の不仲は一ノ谷合戦辺りから始まっていた。義経の目覚ましい武勲に目を付けた後白河法皇は、権謀術数を用い、頼朝と義経を対立させようとした。政治に疎い義経は計略に簡単に乗ってしまう。猜疑心が強く、法皇と距離を置き武家政権樹立を企てる頼朝には、平家が滅亡した今、都で人気の高い義経は不要であった。

和歌

静御前

吟 清水 瞭峰

見るとても うれしくもなし ますかがみ

舞 野崎 電彩

こひしき人の かげをとめねば

いつしか吉野の山には雪が舞い、義経は深山みやまの彼方かなたへと去って行った。静は惜別の情にたえがたく立ち尽くすのであったが、意を決し山を下り始めた。しかし、供の者に裏切られ、義経より頂いた数多あまたの財宝を持ち去られ、唯一人雪の山中に置き去りにされたのである。

義経流離

大野恵造

一将いつしやうはげ烈しく義経の功を猜そねむ

右府うぶぜん讒を容れて骨肉を逐おう

故旧こきゆうぼう忘じ難く芳山ほうざんに入れば

寶ひんを迎えて遇するは唯氷雪のみ

天下てんかすて已に身を置く処無し

乃ちすなわ郎党を具して陸奥みちのくに走る

悲運ひうんの人縁ひとりよくあん暗に憩いこうの時

杜鵑とけんかわ代つて放つ裂帛れつぱくの聲

吟

角田旗峰

舞

前倉島
沼澤光玉
光節

山中をさまよい歩いた静は、明方あけがた蔵王堂に辿り着き、その場で捕らえられてしまった。「静御前」と分かると厳しい訊問もあったが、終始口を割らず抵抗したのである。

老僧の慈悲にも恵まれ、一夜の休息を許され、静は夢の中に義経の姿を求めたのである。

静女

斎藤拙堂

静女せいじよとこ長えながに留むとど千載せんざいの名めい

吟 山形韶峰
舞 和田光波

遺芳いほう又見またる満山まんざんの桜

飛花ひか彷彿ほうふつとして雨衣ういの舞

更さらに想おもう源郎雪げんろうゆきを踏ふんで行くいくを

一方、義経の逃避行は辛酸を極め、再び平泉の藤原秀衡ふじわらのひでひらに助けを求めんと、弁慶他数名は山伏に身をやつし、嚴冬の北陸道を必死の思いで北上していたのである。

安宅の関

綱谷一才

知るも知らぬも逢坂おおさかの

霞かすみに包つつむ旅衣たびころも

露つゆけき袖そでをしおらせて

ここは安宅あたかの関せきの中うち

朗々ろうろう読よみ了おわる勸進帳かんじんちやう

君きみを打うち涙なみだを吞のむ金剛こんごうの杖つえ

誰たれか忠臣ちゆうしんの心情しんじやうに動うごかざるは無しなし

此この情人じやうひとをして永ながく忘わすれざらしむ

吟 早川貴陽
舞 田崎電輝

鎌倉の血涙

激動の一年が明けた（義経二十八歳、静十九歳）三月、静と母は鎌倉に護送された。義経の行方の詮議は厳しく、静は頑として口を割らず、時は過ぎていった。一ヶ月も経った頃、頼朝夫人、政子のたつての願いで、鶴ヶ岡八幡宮に奉納舞を強要されたのである。

四月八日、日本一の白拍子を見ようと、鎌倉武士が固唾を飲んで見守る中、「白拍子静御前」としての誇りを胸に凛々しく舞い始めた。最初は源氏の御代を寿ぐ賀詞であったが、それはいつしか最愛の人を恋うる歌へと変わっていった。

静御前

頼 山陽

吟 湯 沢 霞 扇
舞 河 野 霞 清
佐 竹 霞 鳳

工藤の銅拍秩父の鼓

幕中酒を挙げて汝の舞を観る

しずやしず賤の苧環くり返し

昔を今になすよしもがな

一尺の布は猶縫うべし

況んや是操車百尺の縷

吉野山峰の白雪ふみわけて

入りにし人の跡ぞ恋しき

回波回らず阿哥の心

南山の雪終古に深し

静はこの時、義経の子を宿していた。頼朝は「もし男児なら殺せ」と家来に告げてあった。やがて生まれて来たのは、願いもむなしく男児であった。使の者は抵抗する静から嬰兒を擁ぎ取り、由比ヶ浜に投げ捨ててしまったのである。

最愛の人の子を失った静は秋も深まった十月、傷心の身を都へ戻されたのである。

静御前

松口月城

吟 藁谷宗陽

紅唇綻び出ずる想夫憐

舞去り舞来りて姿凜然

座上の將軍顔色怒る

静姫の貞烈今に至るまで伝う

平泉残照

苦難の末、辿り着いた平泉も、義経にとって安住の地ではなかった。父とも慕った秀衡は亡くなり、その子泰衡は鎌倉の重圧に負け衣川館を急襲した。義経主従は奮戦したが衆寡敵せず、最早これまでと館に火を放ち、法華経を唱えつつ、自刃したと云う。

三十一歳の余りにも儂い生涯であった。

衣川を過ぐ

奥田雄峰

吟 一ノ瀬 錦 蘭

黄雲極目一関の涯こううんきよくもくいちのせきほとり

舞 住 谷 電 翔

此の地義経猛追を逃るこのち ぎけい もうつい のが

想い起す衣川橋上に立つこころもがわきようじょう

死して猶睥睨す弁慶の姿をなおへいげい

あゝ、時代を変えた天才武将源義経、今一度華々しく都入りし、静との平穏な生涯を望んでいたにちがいない。

和歌

竹内蕉龍

吟 深 谷 岳 愨

源平の 興亡今ぞ夢の跡げんぺい

千歳の讐も 潮と流れてちとせ あだ しお

栄枯盛衰は一場の夢…。

静と義経が初めて会ったのは静十七歳、義経二十六歳の時であった。それからわずか五年の間

に、驚天動地の事件が幾度となく起こり、二人はその度に時の運命に翻弄され続けた。

白拍子と云う華やかな園から義経の指南役、愛妾へと身を転じ、強い意志で義経を愛し通した静御前、彼女は芸道を極め、高い教養を持った当代一流の女性でもあった。

今宵も高館に立ち目を閉じると、中尊寺の鐘の音が遠くに響く、静も義経も秀衡も今は亡く、ただ月のみが山河を照らすばかりである。

平泉懐古

大槻磐溪

大合吟

竹内 岳 聳

出演者 一同

三世の豪華帝京に擬す

朱楼碧殿雲に接して長し

只今唯東山の月のみ有りて

来り照す当年の金色堂

義経亡き後、静は天龍寺の麓に草庵を結び、その生涯を最愛の人と鎌倉で亡くした子供の供養に捧げたと云う。

森羅万象この世の事は運命が描く絵巻物の如く、人の一生はその一齣に過ぎない。あの時代から八百年。多くの人々がそれぞれの歴史を刻み去っていった…。

私共も歴史に学び歴史を生かし、次の時代に引き継いでゆかなければならない。

幕

五、招待者大合吟（五十音順・敬称略）

筑波山

本間憲一郎

茨吟連理事長先導 長岡鳳晃

茨吟連

中川舞風	露木鳳孝	杉山吟花	鈴木海洲	島 照峰	齋藤優峰	小林電隆	菊池菱風	加茂吟颺	鬼澤吟瑛	岡野崇鳳	臼井嶺寿	石川玉扇
長岡香鳳	照沼錦光	田口崇龍	鈴木錦源	清水電瀨	莊司錦城	小林北鵬	小泉霞誓	川崎錦憲	片岡霞風	萩原玉清	宇留野敏水	石崎崇鵬
中村香花	豊嶋崇翔	田原吟襄	鈴木電鳳齋	神宮司藤翠	莊司電琇	小嶋刀水	小泉吼峻	菊池敬風	鎌田定郎	鬼澤典子	遠藤竜峰	潮田鳳修

(13..00)

六、第二十五回記念祝賀会

J A 東海会館大ホール

霞朗詠会

根本南城	野口錦山	野口錦洋
塙 電葵齋	平山嗣通	藤 桜風
藤沼暁翠	古市瑞風	前島光淑
前島光桃	望月鳳信	安江玉城
矢澤乾峯	横須賀蒼風	吉田裕峰
鬼澤 霞	飯野霞雲	小田島霞嶺
杉山霞玲	高村霞鐘	高橋霞明
十津川霞浩	塙 霞弘	堀内霞秀
松岡霞信	松岡霞敏	宮内霞睦
水野紀美子	美野輪霞博	森田霞晴

茨城県吟詠剣詩舞総連盟
 県北地区協議会

役員名

(平成二十一年四月現在)

相談役	吉田裕峰	事務局長	野崎電彩	常任理事	澤田岳双
参 与	竹内岳聳	会 計	石川芳岳	澤 畠桂峰	
会 長	佐竹霞邦	監 査	長 田電枝	圓 井明風	
副 会 長	佐藤電秀	常任理事	早 川貴陽	野 田錦仙	
“	深谷岳愍	“	細 谷晃岳	神 永電月	
“	伊藤錦秀	“	北 見龍洸	石 崎恵風	
“	坂本岳龍	“	長 山電桜		
“	向井靜峰	“	大和田光晴		
“	藁谷宗陽	“	赤 津暁昇		
事務局長	田中霞良	“	佐 竹霞鳳		
事務局長次長	角田旗峰	“	田 崎電輝		
“	宮城暁桜	“	島 田岳心		
“	軍地岳幽	“	大竹華陽		

